震災後の子どもたち(4)

地震と絵本づくり

箕浦　志保

忘れもしない一月十七日午前五時四十六分、突然、神戸を中心に襲った阪神大震災は自然界の恐しさをまざまざと叩きつけ、多くの人々の上に恐怖と不安を残した。悲しいかな震源地である神戸市内の保育園では人的・物的に相当の被害を被り、平常保育の続行が非常に困難となった。

神戸市内の公私立保育園、合わせて百五十八か園中、園舎の被害状況は柱・壁等の一部破損が百十八か園。全壊・半壊が十三か園となった。その内、七か園は全面建て替えが必要となるが代替施設の確保が困難なため、再開できるのは早くとも三年はかかると予測される。震災後、十七日経っ

た時点で保育開始が九十八か園と全体の六十二％であるが、中には園舎が破損したり、また避難所となっていることから保育不可能園が六十か園ある。

震災直後、転入して来た子を緊急入所児というが、神戸市では再開の目途が立つまでの間、公私立の交流も含めて被災者が他の保育園に入園する希望があれば、定員の十五％増まで受け入れ、保育を行う制度を打ち出した。

私どもの学が丘保育園（定員百五十名）は垂水区にあり「やや被害のあった地域」となるが、外壁のひび割れが著しいにも関わらず他園から緊急入所児が三十名入って来て、一挙に百八十名に脹れ上がった。そこで、急きょ園庭に仮設教室を建て保育を行ったが子どものあそび場である園庭が非常に狭くなり、運動会ができるか否かが心配となる。一方、保育者の加配が必要となり、急きょパート保母でまかなう。

震災直後の乳児の行動

二歳の緊急入所児A夫は毎日激しく泣き、指吸いがひどく昼食も殆ど食べようとしない。お昼寝時にカーテンを閉めると急に激しく泣き続ける。

A夫の家庭は被災の最も大きい灘区に家を新築した所へ地震が起き、新しい家は崩れローンの返済のみが残り、母親は働きに出ていた。

二歳の在園児B子は登園時、母親に抱かれたまま泣き続け離れない。保育中は保母の身体の一部に触れたまま離れようとしない。

B子は親子三人寝ていた所へ天井が落ち、二時間後にかろうじて救出されたのだった。

○、一歳児の在園児の場合は地震後、殆ど眠っていたせいか恐怖をさほど感じず、震災前とあまり様子は変わらない。

震災直後の幼児の行動

四歳の緊急入所児A子は登園時、父親の胸に抱

かれて終始激しく泣き続ける。

看護婦である母親が震災直後、A子を父親に預け被害の最も大きい灘区へ仕事に出かけたが、交通渋滞で帰宅できず職場で寝泊まりする日が続いた。面倒を見ていた父親も一日も早く仕事に復帰しようとする姿をA子は察知して母親のように帰らないのではとの不安があった。また、同居している障害を持つ叔母が地震時パニック状態に陥った姿をA子は見ていた。以上の三点が原因となり、A子の精神状態が一層不安定となっていったのであろう。

一週間後、母親に手を引かれ登園して来たA子は門柱にしがみつき、「ママ行かないで」と泣き叫ぶ。

保育者は、A子の気持ちが落ち着くまで母親が家庭で面倒を見るよう勧めた。

一週間後、A子はやっと笑顔で登園した。その三日後に熱を出し欠席したが、その後元気に登園するようになった。

五歳児にもなると、震災後、余震がある毎に

▲登園時　泣き叫ぶ子どもを受け入れている

「今、何度？」と不安気に聞きに来るが、慣れるに従って友達同士で「今、何度やで」と震度を言い合っていた。

精神的に未熟な子どもは大震災の恐怖に直面したことや恐怖がとれないまま他園に緊急入所させられたことで、心の痛手が予想以上に大きく極度の情緒不安定を起こし、必要以上におびえる、指吸いがひどい、ちょっとしたことで泣き出し激しく泣き続ける、しがみついて離れない、保母に身体をすり寄せ異常なまでに甘える、なかなか寝つかない、表情もなくぼうっとする、昼食を殆ど食べようとしない、園庭に出て遊ぼうとしない等の症状が現れた。これらは幼児期に非常に強い恐怖体験を受けたことによって起きる、心が混乱した状態と言えよう。

保育者や保護者が、心の余裕をもって惜しみない愛情を示し、子どもの声に耳を傾け、よく話を聞いてやり、精神的支えとなる対応をしたことで、やがて子どもの傷ついた感情が癒され、平常心に戻っていった。

絵本づくりで心の復興を

私ども学が丘保育園では昭和五十九年から毎年一冊ずつ子どもたちと絵本づくりをして十六冊の絵本を出版した。

地震後、これらの経験を生かして『おこったなまず』の絵本づくりに取り組んだ。

その理由は、地震によって子どもたちが受けた心の傷を一日も早く癒すために、地震の思い出を避けて通るのではなく、これらを題材にして思い出を吐き出させ昇華していくことが重要だと考えたからである。

ところが、『おこったなまず』の絵本づくりの構想を練り始めたはいいが、これまでの絵本づくりと違って震災直後の混乱状態の中で、にわかに

つくる絵本の構想は、そう簡単に思い浮かばず、夜を徹することもしばしばあった。

『おこったなまず』絵本の内容

自然の豊かさの中でのんびり畑仕事をしていた主人公じろべえは、ある日スピードを上げて走って来た車に追い越され「車が欲しい」と思い、その後、車を買って走りました。次に、狭い道を広げ、山を掘ってトンネルをつくり、車がスイスイ走れるようにしました。ところが、野原に住むワシやヘビの神様の怒りを受けた。それでもこりずに、じろべえは池を埋め、ビルを建て文明の便利さだけを追い求めていった。

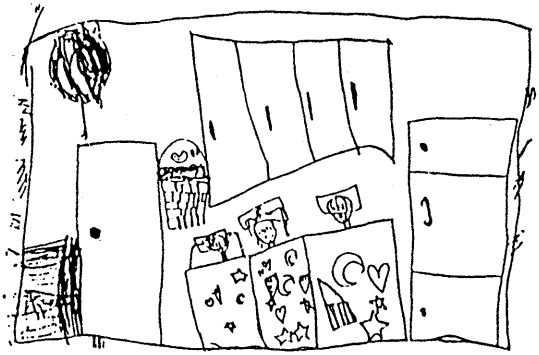
ついに、じろべえは島と島を結ぶ橋を架けようとした時、つい間違えて池に眠っていたなまずのしっぽと島を結んだ。その時、突然なまずが暴れ出し、大地震が発生した。じろべえは車と一緒にビルの下敷きとなり、かろうじて助かったものの、涙を流しながら自然をいためつけたおろかさに気がついた。

以上のストーリーを四、五歳児に語り聞かせた後、体験学習に出かけた。あらかじめ、バス会社に行き先を指示しておいたので、三の宮の倒壊した傷だらけの町並を見ることができた。子どもたちは「ウワー、ビルがいっぱい倒れてる」「下敷きになってじろべえが死んだんや」と各々が地震の恐怖を語り合っていた。その後、絵本の中に登場するワシやヘビのいる王子動物園を見学し、なまずのいる須磨水族園にとバスを走らせた。いずれも園長さん自ら動物の習性について、分かりやすく説明がなされた。子どもたちは「ワシが怖い顔して怒ってる」とか、なまずを指差しては「なまずのしっぽを引っぱったから地震が起きたんや」と言いながら、実物と絵本のストーリーをだぶらせていった。

興奮冷めやらぬ頃、子どもたちは、いともスムーズに絵本づくりに取り組んだ。そこには、実体験をしたことにより、内容が子どもの心の奥底に浸透し、親しみを増したからであろう。無心になって絵本づくりをする子どもたちの姿から、いつしか心の動揺が整理され、次第に落ち着きを取り戻していった。一つひとつの絵には自分自身の心を復興させていった子どもの生きる力が息づいている。

四月十三日の早朝、仕上げた原画と原稿を抱え

▲こうそくどうろがこわれてきゅうきゅうしゃがきている



▲おうちでねているときにじしんがきたよ

絵・学が丘保育園児

東京の出版会社に出向いた。折しも東京駅は地下鉄サリン事件の真っ最中で、物々しいアナウンスの声に人々が足早に去って行く。

その中を予約していた出版会社を走り廻り、やっとフレーベル館と契約を交わした。ほっと胸を撫で下ろす間もなく最終列車に飛び乗った。

それから二か月半が経った頃、園庭で遊んでいる子どもたちの前に、出版された絵本二千冊を積んだ車が入って来た。子どもたちは我れ先にと車を取り囲み、「早く見せてよ！」「絵本が本当に出来たの？」と期待と不安の面持で見つめている。厳かに一冊の絵本を取り出すと「ワーッ」という歓声と共に「僕にも、私にも」とかわいい手が差し出された。絵本を手にした子どもたちは、さも大事そうに滑り台の上で見る子、ブランコに腰かけて見る子、砂場でしゃがんで見る子等、思い思いの場所で、思い思いの格好で絵本に見入っていた。「僕の描いたなまず載ってる」「このヘビ私がつくったんやで」と言っては、わざわざ見せに来る子、「〇〇ちゃんのつくったワシが載ってるよ！」と大声で知らせる子等、どの子の顔も明るく生き生きと輝き、自信に満ちあふれていた。その姿からは地震で受けた恐怖心など、消え失せていた。

自分たちの描いた絵が一冊の絵本になったことで子どもたちはこれまでに増して一段と、たくましく成長していったように思う。絵本づくりに関わった保育者たちも、それらの姿に感動をおぼえ、絵本づくりが子どもの心の復興になったことを実感した。

その後、震災で受けた保育被害状況と、子どもの心の傷を癒すためにつくった『おこったなまず』の絵本を盛り込み、「阪神大震災が保育に与えた影響」と題して論文にまとめた。折しも開かれた日本保育学会や世界幼児保育・教育機構大会で発表を続け、同時に絵本の原画も展示した。その

ことで日本はもとより世界の幼児教育者までもが興味、関心を示されお土産にと購入された。これら『おこったなまず』の絵本を大震災を体験した日本の子どもはもちろん、アジアの子どもたちにも是非、読んでもらおうとプレゼントした。その後、台湾、バングラデシュの先生からお礼の電話が入り、同国の子どもたちが今、その国ならではの素材を使って『おこったなまず』の手づくり絵本をつくっていると聞く。どんな絵本が送られて来るのか楽しみに待つこの頃です。

一方、『おこったなまず』の絵本を購入された、瀧弘二さんという方が絵本のストーリーに曲をつけて送られて来たのには感動した。十月七日に開催する運動会では、四・五歳児八十七名が『おこったなまず』のリズム表現をし、その中で瀧さんの作曲された歌を歌います。当日、珍客として台湾から張園長先生初め、作曲された瀧さんも来園され、震災の被害に合った私どもの子どもたちを励まして下さいます。

当園の子どもが手づくりした、たった一冊の絵本を中心とした保育の交流が今まさにアジアに広がろうとする中で、アジアは一つという感を新たにする思いである。

（学が丘保育園・神戸アジア保育交流会）